

【特別講演】

ウマの心理とコミュニケーション

座長：坂本浩治 (JRA 競馬学校)

(開催のねらい)

平成18年「ウマの躰を考える」と題して第19回学術集会シンポジウムが開催され、乗馬、競走転用馬、幼駒期・育成期・競走期の馬に対する各界のホースマンによる講演に加え、犬の躰の視点からも活発な討議がなされた。そこでクローズアップされたのがウマに対する人のリーダーシップの大切さであった。

あれから8年が経過し、ウマの躰やリーダーシップについては、各競技分野において少しずつ変化が見えてきているものの、まだまだ浸透したといえる状況とはなっていない。今後とも経験と勘の世界に、科学の視点を加えての啓発が重要と考えられる。

持田氏はアメリカ発祥のナチュラルホースマンシップの考え方に基づき、リーダーシップの構築から躰までのプロセスにおけるウマとのコミュニケーションのとり方に焦点を当て、乗用馬ばかりでなく競走馬に対してもその考え方の普及に当たっている。馬産地でのセリ展示におけるウマの躰の飛躍的改善の一翼を担われた方でもある。

現在ではストレスが多いとされる臨戦態勢にある競走馬に対しても、ヒトと理解しあう関係の構築の重要性の認識が広がり、ウマの特性を理解した取り扱いや躰について活発に普及活動をされている。また、その二次的(副次的)効果として、この世界ではつき物の労災事故の未然防止にも大きく貢献している。

彼は、こういった「ウマの躰」に対する考え方の変化や現状を肌で感じ、ウマのことを最もよく知るホースマンの一人であり、その考えに触れることに我々は大きな興味を抱く。

欧米に比べ日本ではウマの裾野が狭く、体が大きく危険なウマを御すために強い道具と力で押さえ対処してきた面がある。それを農耕民族と騎馬民族の違いに帰結させる考え方もある。日本の在来の馬たちは小ぶりでヒトの力でも御せたかもしれないし、武者絵に見られる様にその行為は勇ましく見せる側面もあった。しかしその行為は危険かつ粗野な取り扱いであることから、見るものを幸せな気持ちにするものではない。持田氏の説くウマとのコミュニケーションを深く理解することにより、力に頼らずウマとは理解し合えるのだという意識が広がることで、日本のウマ文化の民度がアップするのではないかと考える。

(講演要旨)

持田裕之 (D-J RANCH)

我々がウマに接する機会は、乗馬、競馬、使役、愛玩など様々なケースが考えられる。乗馬クラブでウマに乗って思いどおりに操作できたり、育成牧場で指示どおりに調教できたり、触れ合いの中でウマから癒されたりなど、馬に従順さがあれば

多くの人々に喜びを与えてくれる。そういった従順性をウマに求めていく中で、いかなる場合や場面においても「ウマの心理を理解すること」ができれば、より親密なコミュニケーションを図ることができるのではないだろうか。

アメリカのある有名なトレーナーが「調教の中で9割以上はメンタル的なこと」と言っていたが、それほどメンタル面がウマと関わる上で重要なウエイトを占めている。単なる触れ合いの域を超えて競技や競馬など、ウマとともに一つの作業を行うのであれば、なおさらウマという動物を知りその心理を深く理解する必要がある。そうでなければ日々の練習や調教、その集大成としての競技や競馬においてウマに円滑性を求めることは難しくなってくる。加えて、ともに快適で安全に作業を進めていくためにも、ヒトとウマの相互理解を求め、ウマの心理を中心に考察することが必要であると思う。

ウマと接する現場において、多くの方たちが乗り方や扱い方、騎乗姿勢などについて指導者から指摘を受けると思うが、もちろんその手法にも古くから蓄積された理屈や理論を伴っている場合も多く、当然理解して身に着ける必要はある。しかし一方で、ヒトとの関係が十分に構築されていないウマでは、上記のような手法ではうまく理解し合えない場合が多くあることを経験している。我々は単に手法を学ぶのではなく、どういう理由でその手法を採っているのか、そうすることでウマはどう感じているのか、などについて少しでも具体的に理解することにより、そのようなウマでも何らかのコミュニケーションの糸口を見つけることができるかもしれない。

講習会では、「どの様にやればうまくコミュニケーションを図ることができますか？」という質問を多く受けます。しかし、「やり方」を模倣、実践することよりも、ウマの発するボディールanguageや行動のサインから心理や精神状態を理解し、ウマのことを深く感じることができるようになれば、特定の手法にとらわれることなく、様々な方法でコミュニケーションを図ることができると思う。

今回は、「方法論」というよりも、物言わぬウマのことを我々がより深く感じることができるようになるための「考え方」・「しくみ」を多く提案したい。ヒトがウマの性質や性能から、習性や行動を理解した上で、ウマを感じ対話することができればヒトもウマも互いに安全で快適な環境づくりができるのではないだろうか。